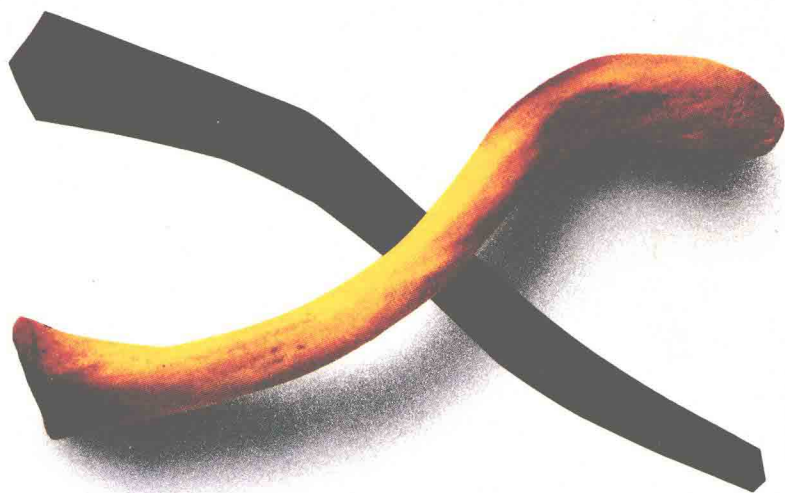


わたしの鎖骨



花村萬月

わたしの鎖骨

花村萬月



花村萬月 はなむらまんげつ

1955年東京生まれ。89年「ゴッド・ブレイス物語」で第2回小説すばる新人賞を受賞。著書に「眠り猫」「なで肩の狐」「ブルース」など多数。近著に「真夜中の犬」「月の光」ルナティック「ヘビィ・ゲージ」「紅色の夢」がある。

139290

わたしの鎖骨^{さこつ}

1994年3月10日 印刷

1994年3月25日 発行

著者 花村萬月
編集人 吉田俊平
発行人 田中正延
発行所 毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋
〒530-51 大阪市北区梅田
〒802 北九州市小倉北区紺屋町
〒450 名古屋市千代田区名駅
印刷 中央精版
製本 大日製本

¥1400,-

落丁・乱丁本はお取り替え致します
Printed in Japan 1994

ISBN4-620-10497-3

目次

わたしの鎖骨 5

カオル 31

秋の話 47

ハコの中身 73

新宿だぜ、歌舞伎町だぜ 135

装帧
荒川じんぺい

わたしの鎖骨

わたしの鎖骨

ステップが路面を噛む衝撃が伝わって、夫の背がこわばった。

わたしは他人事のように、倒しこみ過ぎたのだ、と思った。

直後、後輪が浮きあがった。そのほば真上に乗っているわたしの軀からだも、斜めにかしいだまま、リアシートから浮かびあがった。

わたしの軀は重力から解放された。わたしは宙に浮いたまま、夫の背におんぶするようにしがみついているという奇妙なかたちで、黒いアスファルトの路面と、その上にまだらな模様をつくっている落ち葉を見た。

落ち葉はおおむねくすんだ枯れ葉色であつたが、まるで乳児の舌先のように朱い紅葉もみじの葉もあった。

そればかりか、迫りくる路肩の排水溝に投げ捨てられたたばこの吸い殻や雨水に集められた権

の実やどんぐり、松ぼっくりといったものまでもが鮮やかに網膜に映った。

わたしは椎の実に穿たれた虫喰いの黒褐色の穴まで感知した。たばこのフィルターに付着したタールの、まるで年輪のような茶色の、苦そうな味のする模様も見えた。

ほんの数秒の間であるというのに、わたしの眼は路上に散ったいろいろな物を、冷静に、正確に、意志とは無関係に観察した。

死の直前には、その人の一生が走馬灯のように駆けめぐるということを聞いたことがあるが、あれはそれにちかい感じだったのかもしれない。

さらに解釈すれば、普段のわたしは周囲の物やできごとを、じつはほとんど見ていなくて、自分のせせこましい日常にとって必要なものだけを認識して、あとのものはきれいに切り捨ててきたのではないか。

それがいまのように宙に浮かんで、自分の意思ではなにもできないという状況に陥って、わたしの眼は、初めて路上に散った落ち葉の正確な色を感じて、網膜に焼きつけた。

もともといつまでも宙に浮いていられるわけではない。

わたしの軀は夫の背から引き千切られるように引き離され、夫の頭の上を飛び越えていく。

夫が道路に尻餅をついたのが見えた直後、わたしの軀も引力に掬め捕られた。黒々としたアスファルトの路面が迫る。

初めにフルフェイスのヘルメットの頂点、やや左側が道路に激突した。ごっつん、と即物的な音

がした。でも、頭のほうには殆どショックはなかった。

つぎに左肩が路面にぶつかった。わたしはなにもできずに、ただ起こることを受け入れるだけだ。

路面に接触したヘルメットと左肩を軸にして、わたしは晩秋の南伊豆、国道一三六号線、通称マーガレット・ラインを滑っていく。

宙を舞っていたときはあれほどあたりがクリアに見えたのに、いまは革ジャンの肩の部分が路面との摩擦で焦げる匂いを感じるほかは、なにも見えない。音も聴こえない。

やがてわたしは糸の切れた操り人形のようになって補修で継ぎはぎだらけの路肩に転がった。

さきほどまではBMWのリアシートで眼下に見える落居の集落、そして西日を反射して揺れる太平洋、遠江灘に歓声をあげていた。

いまは腐りかけた匂いさえする枯れ葉のたまった路肩で顔おれて呆然としている。

尻餅をついていた夫は、わたしではなく、BMWの青いオートバイに駆け寄った。昔の空冷水平対向二気筒ではなくて、水冷直列水平四気筒の一〇〇〇ccだ。

空冷水平対向とか水冷直列水平四気筒の意味がわかつているわけではない。夫に聞かされ続けて、丸暗記してしまっただけだ。

夫は路上に横たわってガソリンを滴らせているBMWを全力で起こした。路面に擦れて削れてしまったフェアリングの左側に跪いて、泣きそうな顔をしている。

わたしは揮発するガソリンの匂いをかぎながら憤りを覚えていた。改造の費用を加えれば四百万ちかいお金のかかったオートバイではあるが、妻であるわたしよりも、まずオートバイに駆け寄るとはなにごとか。

たまたま通りかかった自家用車のドライバーがだいじょうぶですか？ と声をかけると、夫はうるさそうに追い払った。

夏の海水浴シーズンはかなり渋滞する道らしいが、いまの季節は殆ど交通量がない。夫はBMWを路肩に寄せ、止まってしまったエンジンをかけようとあがいた。わたしの咎める視線に気づくと、血走った眼差しでまくしたてた。

「たぶんプラグが濡れてかぶってるんだ。こんなときはアクセルを全開にして、大量に空気をシリンダーに送り込んでやって、セルをまわしてプラグを乾かしてやればエンジンはかかるものなんだ」

それがどうしたというのか。わたしは声をあげた。

「ばか！」

声をあげた直後にBMWのエンジンが吼えた。夫は肩をすくめ、どこか得意そうに、路上にへたりこんでいるわたしに近づいた。手をさしのべる。

「ほら。起きろよ。怪我はないか」

わたしは苦笑した。上目遣いで睨^{にら}んだ。

「人間の怪我はほっといてもいずれ治るが、壊れた単車は自然には治らないって言いたいんでしよう」

言い古された台詞（せりふ）を口にしながら、さしのべられた夫の手の、使いこんで変色したライディング・グラブを見つめる。両手で夫の手をつかもうとした。

動いたのは右手だけだった。左手は肘から先はかろうじて動いたのだが、肩のあたりはまったく意志が通じない。他人の左手みたいだ。

夫の顔色が変わった。わたしもようやく自分の軀の異変に気づいた。とたんに脂汗が流れた。額、背中。自分でもはつきりわかるほど大量に汗がでた。とくに背中の汗は腰から尻の割れめあたりまで伝いおちた。

わたしは呻うめいた。呻いたとたんに首の左下あたりから胸や肩、腕にかけてひろがる痛みに気づいた。

鋭い痛みと、鈍痛がいつしよに重なって、心臓の鼓動にあわせて増幅していく。わたしは路上に座りこんだまま口を半開きにして動けなくなった。なんとも情けない格好だ。痛みに顔を歪めながら、苦笑いした。

夫は通りかかった軽トラックを停めて、なにごとか叫ぶように訴えている。軽トラックの運転手は頷き、わたしを一瞥して、黒い排気ガスを目一杯吐きだして走り去った。

あまりの痛みに吐き気さえ催したころ、救急車がやってきた。赤い回転灯（いっや）が嫌だった。この車

にだけは乗りたくない。

まだ目許に幼さをのこした二十歳なかばぐらいの救急隊員は、わたしの全身にずっと視線をはしらせてから、顔をのぞきこんだ。わたしの瞳をのぞきこんで、深く頷いた。

とたんにわたしは彼にすべてをまかせる気になった。おろおろしているだけの夫と較べて、なんと包容力のあることか。

救急隊員はわたしの革ジャンのジッパーを下げ、首の下にそっと指先をあてた。うしろに立っている中年の救急隊員が訊いた。

「鎖骨か？」

「鎖骨です。ほかはだいじょうぶ」

さらにわたしに向かつて言った。

「軀をかたむけて、右側を下にして。そう。折れたところを心臓より高くするんです」

「――折れた？」

彼は答えず、微笑した。

中年の救急隊員が強引にわたしの革ジャンを脱がした。わたしは下唇を噛んで激痛に耐えた。脱がしおえてから中年の救急隊員は言った。

「頭に近いからすこし痛むでしょう」

わたしは泣き笑いの表情ではいと返事した。若い救急隊員が手際よくわたしに船の救命胴衣の

ような物を着せた。すぐに圧搾空氣の音がして、救命胴衣はパンパンにふくらんだ。わたしは感嘆した。空氣で折れた患部を固定するというわけだ。

同時に汗まみれになったトレーナーが肌に密着して、なんともいえないわびしい気分になった。「立てますか？」

わたしは左右を抱えられるようにして救急車に乗った。救急車のベッドに横たわると、悲しくなった。不安になった。

「夫は……？」

「オートバイで後をついてきていますよ。BMWですか？ 大きいですね」

わたしは眼を閉じた。舌打ちしたい気分だ。調子に乗ってカーブを攻めすぎて転倒したくせに、救急車に乗せられたわたしの後を傷だらけのオートバイで追ってくる夫。

やがて救急車の振動が折れた鎖骨に響きだした。先ほどとは違った刺すような痛みが皮膚をはしっていく。わたしが身を振ると、若い救急隊員がそつと手を握ってくれた。

運ばれたのは、妻良に近い高台の、白い病院だった。まだ新しく、病院独特の消毒臭にまじって、塗料の匂いが鼻についた。

救急隊員は看護婦に耳打ちしていたが、それを終えるとわたしに一礼してあっさり背を向けた。夫の姿はない。わたしは取り残されたような不安感にあたりを見まわした。病院の受付に行く

とか言っていたようだが、痛みのせいかはつきりとした記憶がない。

看護婦が横柄に顎をしゃくった。わたしは愛想笑いをうかべて彼女に従った。

エレベーターのなかに看護婦とふたりだけで閉じ込められた。わたしは会話の糸口をつかもうと、思いきって訊いた。

「こういう怪我に健康保険は使えるんですか？」

とたんに看護婦は狼狽した表情になった。

「わたしはそういう質問には答えられないことになっています。交通事故でしょう？　まずいんです」

わたしは、はあ……と頷いて視線をはずした。なんとも気まずい雰囲気だ。看護婦は二十代の後半、わたしと同じくらいの歳だろう。口をすぼめてわたしを無視している。

医師は雑にわたしの折れた鎖骨に触れた。わたしは痛みに耐えて、口元に笑みをうかべる努力をした。上半身裸にされて、我ながら健気だ。泣きたい気分だ。

「とりあえず、鎖骨バンドで固定しておきましょう。で、どうします？」

「なにがですか？」

「東京でしょう、お住いは。ここで応急処置だけして、東京で入院なさったほうがいいでしょう」

「入院……」